七百五十九番

[illegible]

[illegible]

# 詩諧初学抄

全

## 雅諧初学抄

雅諧式目は代々歌学者の所業にはあらず
所詮作るべきは式目世間
に有るを云て見るとなく
あるべき人は歌をもかけども記
し置さら侍しかども是はなべて
なべて人時乃邪奥よりひ絶
のかりにたてること木折越
と嘆くべし式は花とちるみ春之
東もとこ時くもかくべ利はよ
云作て畢竟式目世間物とみ

えらび古来より用ひ来れる
ハ和漢乃法度小ひろ九郎紙
乃新ハ遠国に倍紙をかて前
乃如紙わるゝ品よりあり
て付ける所乃ハ九郎紙
小ハ連歌の徳九郎ふるい所
つもりたのこと作るとゝ也
一倍紙用ゆ事二ハ自讃
しけてもおきもの事三元
めん無ものゝ事四
紙乃ともうら学ひあるて

和歌乃浦あみよ紙也作り
ゆ事ハ集古今乃事歴
乃的ゆすとも一百にゝ人真
珠ゆ作ハ何ゆともひろく
引よせて付ける事へきゝ元文
乃ゝく先新式よ書ゆゝ
和漢法度乃除く
一景物草木ゆゝに遠方図和
ゝ人ゝ
一春風松風ホ二乃物ハ折ゆゝて
ハゝゝもて立ゝ

一同季ハ連歌のごとく七句まで也
此外七句去ル物ハ五句さるべし
一連歌のごとく五句て嫌物の事
同字神祇釈教述懐恋旅之
一五句去ル物三句きらへと云ハ木と木
草と草山ト水辺居所夜分
衣裳ハ鳥と虫と也獣と
きらふもの也同之
一三句去ル物二句きらへとハそれ
なれどもひき木と草とのるいハ
降物之但雨ト雪雲ト霧乃類之



雨と夕立村雨時雨未連歌ニ
ハ五句之誹諧よハ三句嫌也
一二句去ル物又打越嫌也
たとひハ連歌のごとくなるへし
一一座一句ノ物常ニ節云ハ千する
すみも二てきらへ但同季によハ
めづらしき句編折入替へし和と漢よ
二也
一男女虎狼未連歌ニハ千句ニ
も一とあり和漢よハ百韻の
時も一つ出面八句ノ内も可嫌

千句あるハ二もとを折ふし
て和と漢ふわ人しに仕るう
ゝ事なきに物ハ一座一句を
右和漢の篇乃法と

一当世わとらゝ出て同事に
句去よ宝又同事紙数
懐紙懐紙あ紙三句去とゝ
するもわり又同今あたた
紙結とゝ云た氣味
あとゝて事ゝとゝ法
ゝ事ゝ事ゝ紙又ゝ紙

志及ハゝ法ゝふハ志ゝ何ゝ
事ゝ昔ゝ宝ゝ和漢の
法ふ度ゝ地ゝ数ハ懐紙
ゝゝ二ゝ源ゝ
右の法ゝて紙物ゝ
仕ゝ席ゝ当時の
云ゝ又い貴人ゝ人ゝ児ゝ
あゝのれ数句ゝ折ゝ八角捨
わゝ人ゝ事ゝ時法ゝ
ゝ法ゝ伝ゝ法ハ句ゝ先
ハ不行ゝ句ゝて奥ゝ伝れ

八ヶ月間宣にたりてこれを伝ふ人
〻見ていく功者ども迄流れて
文章をそなへて筆ぶりそなへ
て面白きもの真行草こと時の
あるべし

一新式ようなりてとわったらひ
八七句去らるべし

一かりて八句代四名所紙ゑ数
遠音を出べくうれまて覚たい
十句めまて嘆く

一下の句ばかりとめてとめ千句
みも一とわり飛脚よりはいとり
もつてこれ
俗語ぐ者とハ下ぐ者
名所ゑ歌ハ名所ハ
ばかりをいやていそ花もあ
れば雑ら也れば月ゑ海れ
日待出ずて磨ぐ人名
代物〻ものの句ハ不可出さ
すが飛脚ものも和歌の一科か
迄ハ道ようまらる俗ハ付べ
まるべし

一 懐の句小さりて左の如くなる
た例あるべきなれども別し
てこれを作るべし親子籠中
なる懐紙とあるべしてなるに
初句なるべきなり例ハ新夜々
五七物之

一 物よたとへハ連歌ハ能俳諧ハ
狂言なるべしいふ狂言なる
とかくも尚世をやはかなさ
此産乃狂言なるべしハ年れなり
わすれ山ひとりしぬるとまく

一 肝要之
一 俳諧之一句ハ仕立やう肝要
なり上乃五七下乃五七下句
此文字ハ上へあけ多くに
句を終り作るハをのつる句
もしく浪花梅もあるべ寺
たとへハ島山普請作と云名所
同文字ハ山島助普請と号
し作るハ無下にをとり作る
又一ツハ句作を尋常にと
計たしなみ作るハ

ゑそをいろいめすに百韻の中
へたるきくの句れんかもすの句
もまりひとうハあをもきの句
あり
大うこ二百年ゆゑれ名人の
名又當世出来うの句ハふつ
用位豊國東山の大佛三
条ゑ橋淀乃橋六条ゑ門前
ゑハ和ま孫く天下に流布
し伝ハ不者他推ず

一宗祇云角田川ハ書れうり
哥八十祈を大ハ祈ゆゑて強
なりまこの哥ハ宗道とひとも十
祈ハ五とゆ祈ハ一弾と云
とも二種あり
一ハ心乃ちいい二ハハ句の
ちいいこ心の祈を八一法なり
られり句のていいをこれよせ
られるとみこうり心の祈と
云ハ句をこうふして心よ與
をふくめりとゑれていいと
ハ秀句ハかり利休徐

小いひ五所へさうれんや秀句
利休は仕立ちう秀句
八軸乃下あて上下れ文字乃
手代かちふかの弱いの
ともうも一句二句八仕立ちう
物くさ人と会合して
唯に及ひ面白すう時付句よ
知りて二句も成うて素面
動れせり心よ作代こめ初す
句代小仕立仕うう句八誓ば
俳行ありて八及うう此品を

以みうふいかしてうかなうれあう
人うれ発句八皆心代小仕うう
発句も又ふうも市まハ昔れ
上手の発句よ
紅葉うかたてうかうかう錦
千枝の花のあ今也
山乃湾よ白四かうの月出て嵐
又枝垂花服ふ雪座より
うこの菓子ふうれハ
うひうれうもみ茶すう茂代
柄赤代あ小仕うれ文出 絶

村[illegible]の風板[illegible]
又[illegible]
并修繕[illegible]
海丸小出[illegible]
風きつる柳や[illegible]
五月雨に決の雨まつ[illegible]
夜乃東八明[illegible]
柳[illegible]
月小[illegible]
[illegible]
[illegible]

声[illegible]
第[illegible]
右[illegible]
一 時小[illegible]
[illegible]年[illegible]
に[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

へしとなられしそれ故第
九第式八所と開てそれ程
迷八名に沿元すきうゝや
市場ゝ八座中九人くゝ
と思し作り他惟
一迷寄付飛箱付て二節之
たゝ人八ゝ所と云白に月白
又八時毎車付ゝ八迷寄
付之飛箱よハ六中六部八丁
ゝ作ゝ付人ゝ
同清と白に毎馬乗車
八皆完迷寄付
ゝ
ゝ
ゝ飛箱ゝ八
ゝ陽ゝ式ゝ
みゝ作ゝ
ゝ付人ゝ併迷寄
ゝ付ゝ
ゝ式ゝ角と云ゝ
八ゝ中ゝ面白ゝ
くゝ
ゝ
ゝ
ゝ
一飛箱の屋ゝ初ゝ中心後心
と云ゝ形ゝたゝ人八馬と云
白小将巻付巻を打と云

小大豆をひらくぬすんと云小
竹すのこちきうと云白にりち
此内の付合ハみな人毎に沈付
かうと毎ぬれ付り種一合よ
うふ所ハ鳥よ作り将棋を付付
らんとおりひうるも光ハ跡し
うすれもてをうこと物乃心代
打捨て市代立所神う又勢者
おうと付へし掛いふ小めうふし
きうをとうめうすた指合乃
こ作うハ基碁付ふ知りて本

情ハ星賀茂祭系付へし
光も指合作うハ立かうて
古作の付うう小ても付し
物をとわうためても無心而
着ハ一種ハ拾も無本へ
一前白にうれう付白ハ
用付ハ多へしたうハ
碁代立奪代うう
指うう付本ひうう碁
すあひうう所ハうく
こうハ山よかうれ付うう

郭公ときすは多く八月ばかり
花又ときすに力へらぬ昔
ものしたりしとかやいへのうち
ものの力のさやにかけ所にこむ
やうに付なきあんばい
一 神付ものの心付とそこの
乃和ありたい付とは前句
はいかゝ心付とそこの題と結
ひるんとも云り是他の句き
付やうこゝにかゝるものと云
八前句乃相付わるきに元
句付と花八作とゝ付と又心
付と云八式八漢たし式八神号
物紙やうに風体をもて付と
たとへい
月は花にかゝれるり
まゆとりまとゝ
右たい付
ものみぬゝれ行春のゆくへ
ゝ立さる
右ものゝ付
春日里に花ちるとて

ぬきこきもせしの業(ぎょう)をうの紬
は句へ心はせく右仕合ととらく
も作り給へそのたれ〳〵の詞よ
記(うき)しかきまもめし

一一句よ二句も三句も仕て六句
わやわと引よりふまわり
式八百四経文とん付あひへ
源氏伊勢物語をも出て付
兵又枕草子をもしてわろ人歌
作まふ付作りも出て時心とく
作り出作りぬ句みく付句よ

落着とへ人し後悔もあり
まし点をもたに形へ紙へ
しかれまの人とも
らいも同おろろへ

一祝儀ようすきりあるとへ人
小三郎れうん殿の人を付
乃歌句を一二いつ移よあら
又てたまむへし人れ
百を五こ形長久しあむ
し作りも只(ただ)者し又いあり
作者りと云た尚性ゆ

なまねるを花之手ともいへり
ゝ住よりおりて前栽あるの
花を取まゝ付又いかゝなりても
なりとも手作ゝ蒔てゝ
たゝこゝ白ゝもゝ黄色紫
乃白紅帯へし 接拶もま
ほうゝんや何のまに付ても
ん紙うけとゝ云まへし

一連歌立の挑燈をいふ立の
挑燈と云ゆゑ連歌立れ
もいい一句付立尋者

かゝて指合なりてにても
ゝ挑燈立れをいふ指合
ゆゑおかつゝるゝして白作り
ふつゝうへしうちとたゝみん
とおもゝて挑燈を足代れ
てまゝにゝりゝ弟子へし
小学ゝり大学に成ゝ四書
へし

一百韵とし指合とゝり真行の
時ハ挑燈も賦物紙ゝゝ
ゝたゝ人ハまゝよハ松と云

宮城山松唐雲玉松かゝ
りゝ付る紙飛結りよハ節松鬼
松又い男雲女雲かゝりゝ
又ケ月下小賦ホ何も可濃
ケ句ハ時一字雲流題二字返
音三字中畧四字上下畧
ともうゝ〳〵元ハまゝ哥と同哥
あり

一夢想の時賦物ハとうゝす
刈芦結ゝ飛結とあ字書
〳〵下ハ句乃夢想あゝハ
知て九句〳〵上の句ハ時ハ常
ハゝゝ八句〳〵まゝ哥同哥〳〵

一歌仙の飛結とあ字時ハ二
折よ三十六句〳〵ハ仙面ふ六句
うゝ六十二句又二の折ハ六句
もナ二句又うゝ六句〳〵ハ時ハ
月花の字座うりゝ〳〵れ
ふも賦物ハ句〳〵歌仙のゝ
いゝいと書へ〳〵

四季ハ詞并意の詞

物春

正月元日　元三大　年月日　此三
乃ちめ式に以下の通り
一　四方拝　人王五十九代宇多天皇
仁和五年正月一日　天子寅刻
より清涼殿東乃出遊めて天地
四方を拝し給ふ時の事
一　屠蘇白散　同元日より五十二代
清和天皇貞観年中より始て
行ひ典薬寮より奉る薬
一　薬子　元正天子右の典薬を
法奏九女子不嫁用之
一　朝賀　元正天子孝徳天皇
大化二年より始て行ひ去年の
同月廃年式藝閑中門之
一　小朝拝　元日之脱朔天皇
延喜五年に始て行ひ旨下
し給ふ御門を年九始ふ
拝し給へきたり出御
拝し給ふ奉る事
一　内侍所の御供　元正之宇多
御門寛平年中に始て行
事

吉書　書初ハ筆とりそむる
とありそめ　嵩国と書
侍るに　常にも祝ふの時ハ其
ころにも佳書ハ雑へしきと
云説あり又それすえ正に祝
祝て用出度ためしに佳書ハ
天子家例に依て常にも祝
乃時ハ其代用之たとへハ扇ハ
四季ともに物ありて物するにも
涼しきためにはあるを宗とし
候ハ夜に治定せり依て雑
方をひとしくする　年徳　恵方
門神棚　鏡の餅　掛鯛　ほんだはら
ゆづりは　かざりえびかざり縄
蜆の盃　のし肴　大ぶく祝
ねざめ　若水桶　三物まず
此三ケ条元
一
元日節會　十七代仁徳天皇
御宇六十二年に始之
ぶりちやう　玉打　付ぶりぶり　はご板
まゆ緑ほく　はま弓　日矢　縄引
年玉　いたゞきもの　はなびらく

一二宮大郷食　正月二日之五十
三代淳和御門天長七年に
始行し
一朝覲行幸　同二日之嵯峨天皇
大同四年に始て行し
一臨時客　同二日之藤原氏乃
長者真行して天長以下上
達部を招て御宴を給ふ
千寿万歳　楽物　賣物
買物　鶴物　松ちやし
をけら　えうち　せちの御幸

物なし　物寅　物宴

一裏白懐紙　正月三日　北山殿之
一卯杖　正月上卯日之　持統天皇
より始又文徳天皇仁壽二年
ふしもち丈尺三寸九枝之方
九鉄を作りて為之九孔式を
之事也
一御國忌　正月四日之持之天皇
母君の九國忌之十二月上卯
日なもわりなし氏長者之人
物忌不とも所之引ハ月

一白馬節會　四月七日ニ仁明天皇
御宇嘉祥元年ヨリ始　馬ハ
陽成ヘ年の姫ヨ青馬ハ
八弥ん七ヶ所八年矣とのヽ
ヽと云ハ文吉馬ハ春多ニ
一葉摘川神ヶ月七日ニ吉野
勝手の宮九条ヘ七種の事
不及注ヽ
一八月会　四月八日ニ聖武天皇
天平元年ヨリ始ル牧大拾殿
宗勝王経ヲ講せられて朝家
ヽ祈ヽ
一女叙位　同八月ニ持統天皇御
宇始ハ女乃位階ヲ叙せらるヽ
事ヽ
白梅　紅梅　鬼梅　鈴梅
綸旨梅　薮梅　黄梅　常春梅
座梅　花の兄　梅そめ
梅ちら　常盤　常葉
常袖
一賜宴　叙同　四月十一日ニ
景行天皇御宇武田宿禰

より始まれり官人諸國田舍
の月次
一常陸帯祭　正月十一日より始
一踏謌節會　正月十四日より但男
たちの八十六人
天武天皇より始まる
わかれ〻とあり京中乃
極女の声きこえかたらひ
をとこ〻声あり夜明り
あるす
一御薪　月十五日より天武
天皇より始め百官とくく
薪を奉る
一さきもり　月十八日より禁中九
かハ十四日
一賭弓　月十八日より清寧天皇
より始め天上の賭とて臨時の
射手の月次くよりかゝるあ
しかとをもあり
一御忌　四月十九日より廿五日
まで　香忌法又墨后百万遍
をこなひ

一 具足乃餅 彼 四月六日ニ

一 七瀬川 祓 日 晦日ニ後冷泉院

川辛始ル也 雪汁 ハてゝ

中春

一 二月堂行 東大寺 新ハ

二月一日より十四日まてなり

水充て為 祓 ことわりて

新ハ 八雲八重 ハ 雲 ゝ 井戸

ゝり 水 水 出 也 その

水て墨とゝり 札 押

一 二日や ゝ 二月二日に 仏

八月二日 ゝ 待 ゝ 仏

度 ゝ ゝ ゝ 仏 事 ゝ

枝 春 ゝ

ゝ 川柳 ゝ 柳

ゆ柳 ゝ 毎柳 ゝ 柳

梅行柳 柳 柳 柳

ゝ ゝ 柳 ゝ 柳

柳腰 柳 ゝ 鶴の汁

一 春日祭 二月上申日なり

仁明天皇清和天皇毎度行

ゝ 也 ゝ ゝ ゝ ゝ ハ

まゆ小もぢ　作法　九祇園社
も根元をまつりたまへり
一　京川祭　日十一の日　養老
年中始る
一　国幸　韓神祭　二月上の酉の日
桓武天皇延暦年中に始る
一　大原野祭　日上の申の日也
天皇仁寿元年より始る
一　祈年祭　二月四日　天武天皇
四年に始る
一　初午　二月上の午の日　稲荷祭
一　薪の能　日七日より十二日まで
一　遺教経　二月九日より十四日
まで　小野ゑんまたゝめて行
一　時宗　躍念仏　二月彼岸　八月
の彼岸　ゆもまつりあり
用ゐ
ゑんぶ　ゆきのたま　麻
菓子　雀　ちまき
いご　雲母　初ふか　ちまき
ゆこ種ひす　つきゆ　ゆ
ゑ作　かゝまり　わらめ

[illegible] あまたより　田み
みまく　祝ちん　二月十四日
一　きくたう　二月十六日　座敷行
かんてこ　ちんてう　上羽蠟
あ姫　海原　いそで　雪あれ
小田ニ生ル　ちかの姫　鷹　きちろふたり
こ山ちうも云　あひそ　将　いなの絶尾
白尾　鈴　すれ　ゆきて　ちあ
玄九　鷹の羽　玄蕃よ　お作り　奇ハ
器ち

一　御灯　三月三日　一条院九宇姫ハ
一　出水寺　日ハ　村上天皇四宇　長保
比始ル

一　菊花　禁中にて　三月三日
桃の盃　草餅　祝　ひめ　あそび
鶏合　塚　の　ちひ　伊も三月三日
よりき　橘　ちゑん菊　よりてき
たんり　ちさ　ちくし
日枝ち　ちたち　三条せう
すまふ　ちうか　ちうか　ちゑう
ところ　ちう　ちて　ちて

きの花　佛の座　うど
ぜんまい　まつひ　てこうら
蘭の葉　のこれかしら
思あうみ　まゆ作りの花　大花　つゝ瓦
ゐなの花　付　大根　〻
一　石清水　臨時の祭　三月中の午日
南祭丸云村上天皇ハ宇天暦
久年に始ル
一　次広ハ　稜　三月上つ巳日
一　鎮花祭　花の咲比疫神　分散
とゝ[illegible]ん為
千本念佛　桜咲少残て行
一　士生念佛　三月十四日より廿四日
一　清涼大念仏　三月　六日より十日
ち不竜桜　庭の尾桜　〻桜
ひ桜　大桜　畑きん桜　菊桜
こめ桜　星深さら　地桜
西行桜　熊谷桜　きりやい
桜根　矢ノ根ガリ　桜草　桜のり
桜鯛　桜　桜うたこ　桜いと
桜人　小桜かゝ　桜うゝみ

桜多　桜かれとや

花ひら　法ノ行の奥にも又正月の餅のはなむけ　あた花

餅花　花さそ　花入　花りこ

花おけ　花筒　花笠　花ゆかり

花いつと　花のかくし　花の車

花ちる不　結ひ花　火花と数ス

花さへ蓮　花ぬす人　花のあん

花畠　花聟むこ 恋之　花鯉こい 月

香花　花りめ　花こゝろみ

花ちりきさため

花つくり　天晋天宮之此部書之

箕花ノ類　同かしの花　花ちりて

くいたり　きんこのなれ

わんさの花　すりくれなれ

山りしれなれ　うふしのなみ

かけ　ちくまんけ　からくれじ

しをつくさ椿　当世ハ六月土用ニ続之併者ヨリ

続木ハ毒ノ物之たとへも酒も必あたり

むかしの重陽菊の宴ありて昔ハ

あそめ称とえとも当世ハ四季

ともにうんをもゆるにて雅くり

大志てる　伊勢椿　ちかり椿

うす桜椿　ぬき白椿　丸入椿
しか満世ゝ　ぬけうら椿　こち数
とさつすわまつ　ひく流布せさ
おれハ世とうす
てまりの花　小菜ハ
ちゝうけの花　柏南花
白藤　宇治の御茶を摘
き茶　新茶　こわゆ
あひ　うゝ　ひよゝ　雑
しゆうり日　ちゝめ子
ひ[illegible]　[illegible]　巣山ハ山のミぐ
わとれ　表うゝ　うひう
ひうふ
何ゝ鷹羽よ云ゝ
むゝう　黄代ち共云　田代ね子
一　風ゝひ花　三月十日ハ今ゝ　賀茂の星ヨリ行祭
一　東寺門新供　三月廿一日
一　東大寺授戒　孝謙天皇ハ宇ニ始
うすき牛　雀うれ　北生れ庶
いも掘うふ
神農
一　綿ぬき　胃月一日ハ　牡丹

苟菜　山うの末　川邊末
ちくさ　むらさき
杜若　菖蒲ハ書ス
いちはつ　ロ部
桐の花
吾妻ふよ　花菖蒲ハ書ス
書紫ハ書ス　郭公ハ木の花
むらさき　ほとゝぎす
ちのもと
一八幡祭　四月上ノ卯日ニ三輪社ニ
清和天皇貞觀ノ時ヨリ始ル
一稲荷祭　同日ニ　元明天皇和同
年中ニ始ル
一山桙ノ祭　四月上ノ巳日ニ　寛平
十年ヨリ始ル
一平野祭　同上ノ申日ニ　清和天皇
貞觀年中ニ始ル　仁德天皇ノ時
奉ル
一松尾祭　同日ニ同ク宇ヨリ始
一杜祭　同日ニ　河内國アリ
一當麻祭　四月上ノ申日ニ　大和國ニ
一當宗祭　同上ノ酉日ニ　宇多門

九宇小始

一 梅宮祭 同日之 仁明天皇承
和三年ニ始是宮ハ[illegible]ニ在
の宮ハ[illegible]社之 橘氏の氏神之

一 竜田祭 四月第二日之 天武天皇
[illegible]り始 大和国之 水と風の難を
祈る神之

一 廣瀬祭 同日之 右両所ハ同
[illegible]階祭 四月七日之

一 [illegible]佛 四月八日之 夜ニ入日之

一 [illegible]の[illegible]ハ 同日之

一 伊勢神宮 四月十四日之

一 山王祭 四月中申日之 後冷泉院
九宇長久四年ヨリ始

一 賀茂祭 四月中酉日之 神山祭之

一 欽明天皇九宇ヨリ始

一 賀茂のミわれ ハ[illegible]日之

一 多賀祭 四月上ノ子日之 江州犬上郡之

一 関白賀茂詣 四月中ノ申日之 園之

一 融院九宇天禄二年ヨリ始

一 中山祭 同日之 右冷泉院天年始

一 吉田祭 四月中子日之 一条院兼延

元年より始る

一鷹入日元をうたう

はかの鶴名先に毛をかふる夜

誰前雑　だんとゝろ

一蚊帳　はり初四月後申日

一大塔會　陳國天王寺に行

一弱章　四月十八日　二条院

九宇永暦元年より始

三枝祭　元正天皇養老年中

より始　より也麦刈　未綿蒔

あはせ　ひるこ

はり初　はるかぜと生とぶと云り

中夏

一菖蒲　五月三日より年十九年

小始る

一五日節會　推古天皇九宇より始

一端午節　内近右近の馬場猟射

高蒲かゝひ日

高蒲　菖蒲かゝひ日

しんだ付くこの外　ちまき

百草元　まるよはきそひりと云

一きそひ毎　りろうよ八月資二

ゝえすると

一賀茂のけいこ　五月晴之

一深草祭　同日之

麦秋　麦ようやく赤くなり

又たい　白あやめの花　松梅の花

栗の花　せんさんの花　ようたん

ぎぼうゆり　鬼百合　ささゆり

一紫野今宮祭　五月九日之

一永院清宇　正暦五年より始

さおとめ　さ月おとこ　陰り

いちこ　すいろう　歴名　合歓花

ぬりゝ　ぬんすゞ　ぐミ　あらさえ

梅　竹子　葉付実　ぼうこ　たこ云

白瓜　あさ瓜　赤瓜　ひろ瓜

茄子　ちけ　あさ　たて

田瓜　黒瓜　黒瓜　ゆの子　ゆの子云

ひかわ　ひの　何も　友之　佐略

の菓　露の菓　雑之

うつゝひ　ゆ　川うり

ういこ　ゆ　日夜引の糸

一宝明神祭　五月十三日之　播州之

一有毎　同　五日之　村上天皇　宇之始

一宛勝講　長保四年之始

一 着帙改（きくたのまろと） 元明天皇和銅の
比始ル
のち 大豆 栗 蕎麦
こゝ きび 稗 比始まる
小麦 刈
来麦
一 醴酒（ひとよさけ） 六月一日 豊秋天皇の宇始
うるう 餅祝 日月 氷室の例に倣ス
一 延暦寺六月會 四日 桓武天皇
の宇延暦年中に始ひえの山
行 鞍馬竹切 六月 北月祭
一 月次祭 十一月 祈年中に始
一 祇園會六月十四日 貞観十一年
比より始 下京の祭 十七日にれ
うを榊に出 ひえ 十日山かこ
ゆ 宿ル
函谷かこ
長刀かこ 敦家かこ 雑かこ
月かこ 菊水かこ 毋かこ
式部 笠かこ 式部
一 射馬祭 十四日 試弓 十五
日 夜 尾刑 国主

一 樊田祭 同十四日ニ同尾例ニ
一 竹生嶋祭 毒んけゝ云江例ニ
一 安藝國いつくしま祭六月同日ニ
一 伊勢祭例 六月十六日ニ翌十
七日ニ此月八おやもれ先みて
祭ゝ
一 喜宣食 同十六日十六銭ノ物
と飼獨食にも云り
一 志度寺ノ祭六月十七日ニ讃州ニ
一 冨士詣 六月中ニ
汗ゝ 汗巾白髮かゝ
切麦 麦粉 ら稗ら稗ら
ひゝ 鮎のゝ かゝ
さたゝ 瓜わゝ 瓜 ちゝ
ゝ瓜 こゝ 玉葉 東寺瓜
木津瓜 夕ふ日ひさこ 百日紅
ひゝ 瓜の粉 蔓切の菜 南天花
麻引 麦そ ちそ
ゝすの花 かゝ かゝ 沃あき
かもたり 刈 伯翁花
石竹 ぐんひ うら
ゝせん花 ゝせんゝ

てんせん花　風車花　ちんこう
きゝがし　きかしし　志せん
鬼のこそ草　九云　こうすり萩
まん寿はき　孤の花　孤の花色　大根蔚
土用かり　霍乱　香薷散
山椒より　こそ　摘　赤とんこう
うちは　弱りひくう
羽ぬけ鳥　すこし　六月十九日
産及中に行ふ　菓鷹つふ
一　橋立祭　六月廿五日　丹後國
一　こうし　結日　六日　峰日
切麦　麦粉　ちゝ　弱ちゝ
ひう　鮎のこう　かゝ
さたゝ　めうこう　こう
こう　こうひう　こうてん
木津瓜　夕ふ日ひさこ　百日紅
ひうこう　萱切の菜　南天花
麻引　麦そ　麦そ　こうひう
こうの花　かゝ　ゆきさ
かもたう　紅　紅葉花
石竹　ぐんひ　うら
かゝせん花　のゝせんこう

てんせん花　風車花　えんさう
きやうが　きかるし　えんさん
鬼のさこ草　云
まん寿山　孤の花色　大根蔚
土用かり　霍乱　香薷散
山桃　さうそ　橘　赤とんぼ
うちわ　物ぬりひかり
朋ぬけ雁　すゝき　六月十九日
産女中に行事　墨磨つゝ
一　橋立祭　六月十五日　丹後國
一　さうしの節句　六月晦日より晦日まで

一　道饗祭　六月晦日より水無月
一　任官おうひ　月日　水ゆめひ
一　大祓　月日　天武天皇ヨリ始ル

物秋

一　せんたい　七月一日より八月
の為行事
一　ゑんまの市　ひきみなま
物ゝ花　ゝゝ花　もくけ
一　萩の戸　萩をうゑられる
ゆゑ清涼殿おれ二間の為と
や

一 九巧奠 七夕ふ琴を手向ル

一 山伏琴入 七月七日富山飛騨

の三寶院より八月七日参山

琴入 ちんのん敵

一 文殊會 七月八日 仁明天皇

ゆ宇始ル

一 清水寺 十日詣 七月九日夜より

十日初ル

一 盂蘭盆 七月十四日 天平五年

より始ル 飯 月ゝ 結

寺ゝ せうれのたく

一 聖灵まつり をうひ 人惟ま

躍 とうゝ ゝやおの鷹 首八

聖灵の箭を火ふ焼てをけ

めてたくとゝ ゝやうゝ おゝ ありり

ゝゝやきたりとゝ せゝを中

畧してゝたりとゝ ゝや

皆隻 七月十五日 ゝゝ 日ナ 七日

焼米 ゝゝつき

一 仁王會 寛平七年七月 始ル

一 相撲 七月廿六日 日年 月月 始

一 ミさ山祭 七月廿七日 信州 流方

松たこ二章　義人茅　桔梗
鶏頭　仏桑

中秋

一八朔風俗　建長の比より始る
あれ魚　八月一日より江州より元
弥こ
稲刈　もろもろ　いなこ
栗ひろ刈　みをすそ八月
敷賀祭　八月十日こ馬市を立る　敦賀郡こ
いも名月　八月十五夜こ

一石清水放生會　月蓋寺
一ひのたり　又ちこ法こ八月四月月首
右二の祭八山城こ行こ
放生會に対ふ分祭こ
一宇佐宮祭　月十五日こ　豊前国こ
一箱崎祭　月日こ　筑前国こ行こ
一物の祭　月日こ　能登国鹿島の郡こ祭こ
一信濃国弥牽　八月十日こ
一甲斐弥牽　月十七日こ
一こつ祭　八月十八日こ　上京行こ
一武蔵弥牽　八月十五日こ
一上野弥牽　月日こ

初ごん　ちくめき　ちくぜん　よこ引
鷹山切　鷹打　鷹打　若たか
尾張のも　わけ　鷹　日
熊たゝ何もかたゝ木　秋あり
うつうみ　うあさや　日新
鯨　菜を海く　かし
此ま　角こ　そこ　かしこ
何も白　何の小島　海鯨
あのこ　むれこ　栗　くるこ
柳　梨のこ　や　さら
うこ　あつ　ちく
ごんなん　せこし　ほそ
あひつれ　わけび　紅戸
むこ　かも　ふす
種こ　こ　ふこ　松茸
ちい茸　平茸　茸　茸
こうら　ちすき　こ
せこ　初て茸　芝茸
色に茸　篠茸　天狗茸
れもて　こ

来秋

一秋の長久　九月一日

一御所　日三日之
一不憐田菱　九月七日之
一重陽宴　日九日之菊の盃菊
酒　太白の菊　ちい風ふく
ぬまを菊　紅菊　てりこ
こうめぬき　らんきく
猩々菊　小車　野菊
并菊の異名
菊草　かこさ草　西さう草
やりあ草　霜枯草
秋さべの花
山の花もて立てあまし人の
ふ和よハ菊と云字代添へ
一金孔雀条　九月九日之　こがね孔雀
云植武天皇　れ宇さり姫　伏見
の里にあり
一酒酣条　九月九日之
一くゝむの条　同日之　大仮に立て
一伊勢奉幣　九月十一日之
蚩仁天皇　れ宇さり姫
ひんさう　ひさたんとも云
結米の御義　大豆名月

九月十三日之　橘樽　金樽

柚　うら花のこ　雲州橘

久年母　佛手樽　海めり

あつさ引　新酒作り　弥盛

弥冬

一　神ぎり十月一日之いろりひらく

一　亥ノ子の餅日上亥日之　永安四年

始ル

大根引　亥子ゆそ引と云り

ふるかり　いもかり　山のかり

茶かり　そば刈　麦蒔　菊

一　大社神ゝ中ノ亥日之　十月中

宗之

一　射場始　十月五日之　殘菊宴日日之

一　真如堂　十夜十月五日ヨリ十昔之

一　興福寺法花會十月六日之　要日之

一　維摩會　十月十日之　於興福寺行之

元明天皇四年和銅七年ニ始行之

一　金剛羅祭十月十日之　讃岐國ニ

小児よ名ヲ付作り祭之

一　法花ハ新海　十月十三日之

一　磨忌十月十六日之　五山ニ行之

うこぎ　うこぎ　こうの
炭こり　かくしたり　夜方に
昆布菜　磨る海の苔　山ひるも
田物もしらず　そ縄とりと
かもだう　さかたり年に
山茶花　水仙花　ひとし花
冬嶮樓　砂たう　ボ魚ゑ
石花　ボ酒こ　こりまき
もらこ　ぬこ綿　ボまき打
ぬりかけ　布子　霜つら
うこひく雪　炭桶　ちんか
紙豆汁　ちらと　ぬべ
ちらかわこ　藤つき
山三文字のも冬こうとろ和に
こうれ酒　わらん餅　雪餅
綿かし　綿子　雪垣ちこ
小田ニハ十月氏ちり氏のめちをこも
ゆてほむこ
かくり花　ボまニハ仏花も咲ちゆる
弁ひと十月晦日に
中冬
一　暦義十一月一日に欽明天皇四年に始

一朔旦冬至ノ日ハ弥亀二年ヨリ始ル

一相嘗祭 十一月上ノ卯日ニ

一五節 十一月中ノ丑ノ日ニ

一鎮魂祭 十一月ノ寅日ニ

一新嘗會 十一月中ノ卯日ニ

一豊明節會 ノ中ノ辰日ニ大嘗

舎御程ハ五ツ夜ヨリ変更禁中

方ハ申ノ刻ハ 委ハ記シ置カル

所ニ

一小祭 十一月中ノ丑日ニ賀茂民

臨時ノ祭ニ寛平ノ比ヨリ始ル

一小忌衣 ノ日ニ宮ノ神 山城ノ神

伊勢ノ宮ノ五節ノ舞人ノ着

ル物ニ賀茂祭又大嘗会

乃時用ル物ニ

一里神事 禁中ノ内ハ皆里神

事ニ

うふ羽目 きりくす

うかの目 ちのや のうもり

ちうはうふ はふ ほふ ニ催馬楽

のうもり物い雑ニ

ねぐ わらり 雪やけ 雪つみて

雪ふり　くんきさ　そり雪半
右のもの国元にて雪ふりたれす
竹よ一尺二尺のすけきにて
来て年くの雪れやさわさ
とためすゆにて後り
雪ころり　すくいふ　雪打ぬ
一　子条十月上ノ子日ニ夜方ニ
喰ゆ条十一月八日ニかりや方行ニ
冬至　冬夜　かかたき　遠を特
雪すき　雪ふり　雪ふり　山のそり
ぬぐきたり　ぬかの　ふり
一　春日松下御参条　十一月廿五日ニ
一　大師ゆり　十一月廿四日ニ

未冬

一　しゑ子乃朔日　世和ニ云り
一　内侍所祈示　十二月十一日ニ
一　荷前使　日のさきの箱十二月十二日ニ
年れ終ゆ先帝れ陵へ幣帛と奉ル
一　佛名　二月十九日より三日れ間ニ
一　牽牛童子像　大寒日ニ
童ちゝ　暁の鈴たゝき
せさそろ　すくいさ　かくれつき

りら花作り　年末こう
門松ひとつ　節分　鬼はそと
後八内と云ふ　付鬼やらひ
あやらふ　毎年あれこまてきる
面の打　りうまんこう
役こう　光貞節分の事
一　追儺（ついな）節會　節分の夜桃の弓
蓬の矢　邪鬼（じゃき）をいるる
一　あれの神事　大晦日夜あり
長門國
一　安宮綾馬　日大晦日之伊勢國
一　節折　日大晦日こうあれ家婦
家こう云女天子ひつけ給ふ
あり祈代ヨリ始ル
憲之祝
女　あり入　聟（むこ）入　夫婦（ふうふ）めうけ
内おこう　うちあり打　ふうを
懐姙（くわいにん）　こひやこ　ふくきみ
あこ　ふ　腰ふこ
目まもけ　目てこう　そひ祝
二人祝　夜こひ　祝ひこう
ようき　ひこれ　いこ海のみ

ひるまの中　まんまの奥
ゆい入　多人　おくるるしを
ゆるす　遊しき　あひわれ
ふりうち　みめうし　ちう
ぜんつれあるき　て枕
脚布　わらひ日れ又
枕さし　素女　ひやくきを
美合　沉の枕香　男きこひ
好色　二人いさこひ　めうひ
あぐ約束　ちう色ふうこう
ふりうち　かりうれをう
口色にさす　別色　善又
辻立　門立　常れうこひ
海ち上鬮　老女　老女
めいにうれう　貝殖　殖す
はるふ　三ちう　五れ下童
ひたりやこ　皆老日完
好朝よ　神考と
切うち　落髮
一ちう心　かあひ
ひく海象に　猪
ふ乳物　りうひく　けいせい

極女　白拍子　仏御前

池田の宿のゆや　清盛

しかいうなりしこと　なら

ぬ　仏御前の世のきいせいる

よのつひとも　手を組

ちて　ゆぶ　ぬりうの

あるたり　はめうひ

柳ゆれ　ゆうるかと云

祖父うそめにもおすんすす

兄ハうてトのいとけ

りのゝ　仏御前　ふんしるき

れうしく　ハ　きうゝ　めうる祖

ありあ氏の　ちひを　結く

腹よあちうてたうる

一　石宮女　ハ　ふ　悪よあり　仏乃

やと　弟　昌豫法眼よ　光と云ハ

養てけくまうく　女と云一字さえ

悪よあり　仏まして　ハまして　仏養

乃養ハの　女ハ　ふよ　及ふす

悪ふうゝ　ゝと　中まうう

まゝ　めゝ　書　記ゝ　仏り　仏

ゝ　信　時代　手ハ　茅有

一二条后　業平と密通せる
世にうたがはしかりしかば宴にわ
ま　作り

一秋宮　光孝天皇　和天皇　時　文徳
天皇　四皇子　ありこれたのいりふ
とあり　業平　物の体として伊勢
一説　時邪の　うきなかをして
業平に　契り　行ひとこしちう
みやう　清氏　八条宮　文徳　として　今
に　氏　八条宮　不叶　とぞ
高階　岑　緒　子　師　尚　実　者　業平
の　息　と　云

一藤　憲　中宮　かくやく　月の
三　と　時　光孝　氏
の　心　て　冷泉院　を生
行　と　好　院　院
と　事　

一六条　息　物　移　ゆく　面
しく　ひの　上　夕　乃
う　物の　気　ありて
う　行　八　たり
に　作

女三宮 源氏の君をきこえ
給ふ 柏木の衛督 右馬の督 こゑ通
わりて薫大将 源氏の君 生れ給へり
一 朧月夜の尚侍のうへ 花のえん
の夕月夜 こゑきこえんとおぼし
ものおもひすも 源氏の君
小野の御 紅葉の賀 ふてたりひの心た
えやうひ
一 玉かつらの内侍の君 源氏の君
おもと琴 枕乃草子 ねし所
うつの宮 兵部卿宮 思ひ給へ
中納言 人乃心 こゝ
志賀人 こ
一 源氏の君 薫大将の書 ありて
宮仕の宣旨 と白 こゑ通 家通
重 ひ
つ
小野 八月 元
一 木枯の女 左の右馬のかう時
かうの女 神宮の内侍
月 ひ
ち

きあひて此車ふあひのり侍
りこゝろ人行らん者あらん者や
しくゝ心ゝ〻しきこゝろ此女の女
りこゝきあ所ありられハ門ふ
車ゝ立て行りぬる人いくゝ
ゝゝこゝろきて門ちきらぬす
ゝこゝろ物ゝきりけてこゝゝ
月ゝ所ゝかゝこゝろありゝ
第ゝ見出て此あゝかけも
ゝゝあゝとゝゝきりうたゝ
門ゝりまこんゝあゝとゝ
ちにゝゝ今めきこゝり初上人の
ゝゝ所

琴ゝ者も月ゝえあゝ者あゝ
ゝまあきこゝ人をゝやこゝあん
と吟ゝれハこの門ゝり女
ゝゝに吹あゝすゝ所ゝ
引ゝゝゝきこゝの琴ゝあき
こゝまゝ人きゝゝゝすいゝゝく
しき女ありゝ

一源関侍ゝゝる行ゝ女ゝゝ
あゝこゝゝて者ゝゝたゝれ

やり音ことく弾て琴もよし年
めうし行末ハいとそちにありそろ
女ゝ行末と光源氏もゝまちひ
て琴ゝ行ひしとや
しかの源氏一部み伊勢物語ゝ
書行ゝ女ゝ子ゝ行てかゝて
とくくゝきりゝ行おゝ
うゝ姫小納言衛ゝたちひれ
おゝしそのうゝとゝりゝ右衛門
更衣のゝん恋ゝ成行ゝん
とハ吟味して行ゝも貴ゝ

おさうゝ

一

元弓井の弓　内侍大将ゝ
女と琴ゝ行ゝ　なゝうゝまさ
にゝゝ行ゝ　ゝれゝに和寺の威
儀師めゝと心ゝ合てゝ行
しにゝ　二条院ゝて
付行てゝうゝ行ゝにゝと
車ゝおきてゝ　ゝけゝる法師
して何方へ行人ゝ名素姓人
ゝとゝりんとゝの行人ハ二条摂川
数ゝり焼ゝ人ゝとゝ也

そのまゝ祭り行ひ給ひ懷姙(ゑにん)
し給也

一
小猶房(こうのぼう)　高倉院の宮女之雅
も志遠ゆゑ被召れハ記ふ
ぬゝ

一
一宮に息所にたうひよ少ゆ
ゝ殆ゆ中ゆ平記ゆ
統みてゝ

一
勾當内侍(こうたうのないし)　新田義貞ゆ妾之
兄也平記ニ入り

一
妹喜(ばつき)　夏桀王(かけつのおう)乃后之酒ふ
ゑゝ所人をゝて笑之ゆゑ
ゝふに桀王てゝあひのあまり
酒のゝすゆて城ゆきそのゝ
中に酒ゆゝゝて三千人あり
めて鼓(こゝ)をあひゆ一うてい
一度よかゝゝをゝふけてこの
酒をのむ度ふ美ゆ臭とふ
しゝ酒ゆりゝゝゝゝゝ行へい

天下や中ゆ行ゆ
妲己(だつき)殿紂王(ちゝう)ゆ后之炮烙(ほうらく)ゆ砍
ゝ衆ゆゝゝの中ゆ

如こして其上より銅の格を流し
て罪人を沒らも焼死す
とゝして其上より紂王し姐己
にまつりして代を失早

一

褒姒周幽王の后し烽火の
笑として煙をあらるるをこの
て笑し烽火ハ共ためす時の
あひ図の烟こなりしに諸侯
せんたゝ為に烽火を焼
ゆゑ共第一ゝす犬戎より
幽王をせめ伐る時軍兵来る

一

して紂よりつゝふる

一戚夫人漢の高祖の后なり
てゝわひ〳〵行ゝて戚夫人の
股乃二のたゝ人れ伝ゆゝり
行りんとおりゝ〳〵めり一の
后呂太后大きにうらゝく
おりゝめして張良代められ
此井いゝ伝ゝんゝきやゝ
ふゝゝとゝめゝゝ人し
このたゝ人ハ張良ゝ
高山とゝ所より東園公綺里季

襲黄公　角黍先生として四人
の隠者作りし高祖を伏せ在
とも称すり山四皓と一の
子に対せしかをあり
ゆゑ申すまもなくもんと中
刎呂后れ笑まして四
皓伏めてたるに付ける
へ元にりて天下と呂后の
たゆゆしりけりとも
王昭君　漢の元帝の宮女なり
毛延壽といふ畫士なり

一

いろいろかきなをしの胡国の民
ふしたのたりしれ門女人
なりめて椒房乃るるみ
る結髪の役者なりて遣
らも行ふせしんは馬上よ
て望る伏匈せしこ此古るは
あまれく人の去りめり作
遣いとすくるかのとし

一

虞美人　楚項羽の石と烏江
と云所にて項羽とりうらに
高祖ふうれ作る山石墓

うり生おうう草代義人美と
云り

一李夫人漢の武帝の后にかく
ちうう〳〵くゆゝしく志なり
李延年多作つくりそうたう
傾城傾国と云事はまん人より
始しり李夫人死し給てのち
武帝うゝこにうゝ始て反魂
香焼夫人乃魂とゆめきゝ
ふゝ〳〵

一班婕妤漢王乃宮女怨歌行
と作りて我身代衰よたとへうり
多〳〵ふりうゝ志て君ゆてう
わひよりゝ志時ハ君よ
扇の代手代代ちうすれ夜衾に
涼うゝ〳〵多れとうゝ作て
てゝわひうゝ志ゝ有ゝ作ゝハ
涼風ゝ捨られて秋風ゝ初り
作て八扇を菊乃中に捨て用
けうゝ〳〵と身代うゝみて
獨り俺とうや
西施 越王勾踐の后ゝ越王

呉王は戦まけて死んし
ける時は范蠡は西施と呉
国へまうけ行り呉王又元にまうひ
て會稽山に軍乃時越は越王
まこれ行りぬ越王降参し
ぎ所に成雪をみくして すき
二度會稽のとち成雪と云り

一 楊貴妃 唐の玄宗の后なり
此事ハ始終長恨歌に作ル
委敷ときくよなり

一 昭陽人元も玄宗の后楊貴妃
ふ称ゝまれ作て終に玄宗と
不嫁して上陽宮にとめ
られてうみみすき女とも
一 蘊著蘭 番霊淵が妻こ
とゝろん遺戍へ行て久しく
けりしらハ服にこ入る豊錦
字は特作り錦の紋織て
送りし女こ
一 楊枝 白乗天の妻こ樂てう年
老て病をとり時は女
他人送らんとれをとり女別

と行てそこに泪ありて
ありけき作りとそ

一王朝雲 東坡の書こそ海
南へ謫せられ時に女もそこに
ひそ行海南にて病死し
ぬ東坡ありて詩を作り
いとあはれむ

一黎情 宋胡膽菴か妾こと
たん奢秦檜か酒作りしの
要に詩をきそ作て秦檜
ときんと云詩に天子へ
捧をかふりて海南へ十年を
流せしかはしに女もそなて行ぬ
ゆくへ行くに時湘潭にて
酒をのむに女笑てうかにたらか
のあるかをそて梨花に露のそ
と與て詩作りし女こ
ろうそ有よ憲宗
一董堅 漢哀帝乃宮仕へ人こ
董堅いまそこの年に時に門れ
てそあひ涙をすそるのあ
にのそれてそるハ西にいる

と勢も所のあるべけれども
に越おんとて移りまさ
りんの衣の中袖に片寄せ
たるかうちうすかる
へき事なりしかれども
あてはの枝にたち桂の門へ
ぬさ捧めて出浦をうらと
かきれ心をくを薫堅たとか
しくありてはいとうとう
ありしこめて裏帝嗣浦の
の時浦をんよひい退服を
切黄泉の中事に供奉
とや

一季節推　東坡うふく少式
そのうち流之有時季節推
風水洞と云亭に行て東坡を
行行う溪橋の水上より梅花
志きりに流来る式東坡あや
しくありし式きひ尋ね
行う少式詩を作まり

溪橋曉溜流梅蕚
知君繫馬岩花落

好色乃たとこ

一業平　ときそに女をあてこ
まりしき恭男と云り色こ
のめ[illegible]尽しかく

一こふりのいろめいろめ下乃
いろこの[illegible]ありと伊勢物語
ま書作り

一元ろ源氏あこ[illegible]きこ
のこおくこ作まいろまに
作七ア作らんや

一柏木右馬の[illegible]の軸は
ろり女三宮をういまみ[illegible]
やの[illegible]意死せ人こ

一白兵部卿　ろり中将の生得
ま男七白[illegible]
やおもんたにたき掛
とれこたきしめて[illegible]
八白[illegible]
君小心[illegible]
里にかひ人こ

一源氏の[illegible]乃お将　小野小町
小百[illegible]人とや

一志賀寺ハ山人年老て行業
乃うやすをよ望ひてれ
年ゝりとなりたりて出家の心
と破り行るとや

一昔陸乃国より田舎とこ光
云あり又和泉国よりめ男と
ゆ人云ふきりは二人あるや
乃里にうあいし女と云女り
ようひとりてたりひよ我の
せんとあるそふ女乃歌のいく
とのくれ心さ山ゆ出家ハ

てふふ一ハの乃生四ハよう
きりをゆ水ちゆいゆ人ある
らんさにあるを作らんと云刈
芝ゆ乃ふ一ものちに二人乃
矢からと尾よハされり女
せんさめくてハ川人ゆ家ゆ
う二人の男と作ひて刈
とるけれハ教ゆ来り三人の
死りハゆ光ゆて一ゆよ
ぬるあ塚光ゆ

一作りゆ物絵よ書ゆ好色

の男女人乃名ハ
ハ[illegible]ハ一人ハ[illegible]
[illegible]一人ハ[illegible]
[illegible]一人ハ中納[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]



いとをたかせてはたをり給ふ[illegible]
乃ハ[illegible]人の心ハ[illegible]
[illegible]
やと云姫君乃[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
とうひてたへと云石はしり
はしり打ぬけて[illegible]
[illegible]
乃ち[illegible]
たゝ[illegible]
[illegible]
はるの前よりあり[illegible]
[illegible]錦は綾よ入ひめ[illegible]
にたゝ[illegible]
三人佛の[illegible]

くゝ云元ハ光も有[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

一

[illegible]
山よりゝ云王の[illegible]
てゝ云我屋よ立かゝり
門ハ鎮西へ越也とれいゝ西
[illegible]郡の里に[illegible]
[illegible]上千れ物のたくみ
[illegible]六人まそめ[illegible]也金銀を

心ゑのえうとしてつかへき物式部
らをてやとうれ様して物ゐ元
とかるや姫のうちに屏りをう
ろうも行て東海ゑ数千万
里の風波式まのき新行若
行してうの波よ動り出花式
うもるかとかうり弱人ハ姫の
心ゑも流よ物ゑう一枝ゑれハ
元よハ海けてんゑと思ひ弱人
数折ゑ王のえうを作りし
たうみとも式まりて出ろ式

こひうふそ偽ハあ
里ゆう面月ゑてもうとハ
出てゑけよろうそ

一

たゑ長ゑ新のうひる山人
ゑりうにうとをし安風
ゆうえ家式えと云出ゑハ
法ゑあまれう人ゆそりうう
へ姫さうとう云りの式海て
ゑりうたこうるたこうてゑをう
海新もをうゑりゑうやひうふ
屏う意うう式新つうのうハ衣

もとゝ云物をとゝにはゆてゆるこ
とハ今そうしめあり淑よう分
うしき物と共ふかくて燒ぬ物
ありとゝ云ハ共よ燒てみ
よそ共中に入物ハ
くとやけてうせぬ光もむ
あしく成ぬ

一 大納言大使ゆき光よハ
龍のかよありと云五色の玉
と見てたゝと云是ハあるゝね
井とハ申ひあるゝ所ハ

まゝにひ付て所ゝ分行
ふ久しく海ゝ流れハゝ
てゝゝゝ新潟の浦ゝ毋
おしてゝふあふまてと家
ゝゝ成漕屋ゝゝ悪風
志きりに吹てゝそに毋付く
ゝ入ぬとし伊豆ハゝ
のいゝゝ成ゝけんとれ
ゝめすにゝ新井のあ
とあすゝその中成やゝ海
ゝんの新井人ハ俺云ゝ

海上三つまりのりやと云れ
ちらくの歌そて命うら
くもそめうりにうり

一中納言いそのうみまつたり
ひハよハひそてあれりうら
と云こうもの貝ハ光てたん
とうの光と光作りんとたき
而ふ法そあ其巣ハきうふ
うそけてのりひすハさ
うこうの貝ハうてつとあ
ひあうそとかきうはきあん

こうはこうつて為りれハうう
因よりてたて入人くわハ
てううかにあるそく
きからうして出ん脇乃
貴ハ折折ハ物よのせて
我屋ようかられ居てひす
うつうれハ人ふもあうす
ありにうり何ものくも娘
よハえわそて人うくあるす
ともこ

一

術婆迦

魚賣こ天五乃

内裏よりハ宮女ハ居まてを
商人の行ゆきハ八ばうを賣
男石ばうハいまみてきの心
くらひ俺てをり此井帝
きこしめし情ハ上下にをり
をすを石にたちと海見て殺
とをんをうハ車ばきちに
百姿かをひあをこを角にまみ
えをりんと有しをハ九十九
夜まてをりひ一夜をまをて死
しをりとを此井おれ物語

ふハ我物の井に書をりゆき
ハ假成の愛ふ
をりひきやをちばをかをこをて
百夜をたをしまをををハ
一こ海乃をかをる　色こばをのあを
くをきを人を世中乃人ハ
をりをハおをもひおをもをををハお
をををふばを人ハおをををを
思ふをををををををを心をり
九業平に
一中將新風　女ハ男ばををみて

越生川人高橋孫右衛門氏ハ新田
もとゆひて高橋孫右衛門ハ男
塚女墓と称して男山乃麓ニ
有名なる墓
こ乃古墓今高橋家のとハ
書に貫うくのかけり

一

桂海律師 此人ハ延暦寺の
門人三井寺の児より梅多
恵と云作る式意こうれてう
き式やうし志人ありす
ハ志ハ書うし

此秘の画ハ梅うりと思ふ
作りし絵こ好みこ
右業平ならりうめて此人今
乃名前白にひられていい何と意
小ありり作らんか

古代一冊江戸より到りて所
望作るもハむさしあを
さまふかけて新こ奉所
君命にうて也武月八幡よ

作ものとなしてこれを題ハうに
筆に記しゆくきうに
乃うまりふ君ぐ意えぐる意せる
るあるりうハ餘多しも辭
しりとなんもひまひて
て書ちむ事にありぬゆ
めくあ見るべき物あう
すべハうに畏みて此
うしたあるん作う

寛永十八齊

四月廿五日　恍亭　徳元